

レーゲンスブルクのパタヒアの旅行記 -1 —レーゲンスブルクと中世ユダヤ社会—

関根 謙司*

This thesis (Part 1) has been written about a Hebrew travel book by Medieval Jewish traveler, Patachia of Regensburg (d.1225). The Author was a Jewish scholar (rabi), born and raised in Regensburg under Holy Rome Empire where should become a free imperial city in 1245.

His travel book has been different to other Jewish traveler in Middle age. Because his travel book was not a guide book, but it was considered a geographic, geopolitic, historical book for Jewish reader.

Regensburg, or Ratisbon, was a capital city in South Germany along to the Danube. It was well known not only as a political, cultural and economical city, but also as a trade commercial city for Medieval Jewish community. This thesis should be aimed to analyze a Jewish social life in the 12th and 13th century.

Keywords : Patachia, Regensburg, Ratisbon, Medieval Age, Jewish

1. 中世のレーゲンスブルクとユダヤ社会

ドナウ川に栄えた町レーゲンスブルク (Regensburg, 別名:[英] Ratisbon [仏] Ratisbonne) は、世界遺産に「レーゲンスブルクの旧市街とシュタットアムホーフ」¹⁾として登録されている。中世の時代、南ドイツ(ババイア地方)の政治、文化の中心地であり、近世から近代にかけては神聖ローマ帝国の議会が置かれていた。古代からローマ帝国の要塞や建造物が建てられたレーゲンスブルクは、ルネサンスの時代、天文学者のケプラー (1571-1630, Johannes Kepler) が没した町と知られる。ドナウ川が町の中央に流れ、旧市街(ドイツ国鉄の中央駅は旧市街の近くにある)と対岸の旧聖カタリナ慈善病院があるシュタットアムホーフ (Sradtamhof) 地区に分かれている。

1245年、レーゲンスブルクは神聖ローマ帝国内の自由都市 (Freie und Reichsstäte) になった。このとき、アルザス地方のコルマル (Cormar), アグノー (Haguenau), ミュールーズ (Mulhouse) や同じスワビア(南西ドイツ地方)のメンミンゲン (Memmingen) も自由都市になっている。すでにバーゼル、アウグスブルク、ケルン、ストラズブルは神聖ローマ帝国内の自由都市として公国になっていた²⁾。それに先立ち、レーゲンスブルクの町を二分していたドナウ川に石橋 (Steineme Brücke) が建設され(1135年-1146年)、ヨーロッパ各地と結ばれるようになった。中世ヨーロッパの国際交易ルートは、北ヨーロッパの都市や中世ヨーロッパの第一の都市ヴェネツィアとも結ばれるようになったのである。レーゲンスブルクは中世国際交易ルート、とくにスラブ諸国との馬の交易の要であった³⁾。

中世以降のユダヤ社会にとってのレーゲンスブ

*人間学部コミュニケーション社会学科

ルク⁴⁾は、繁栄と波乱の時代だったといえる。レーゲンスブルクはドイツで最初のユダヤのコミュニティが設けられた町であった(1020年)。ドナウ川はヨーロッパの交易に大きく貢献するとともに、レーゲンスブルクはアシュケナージの交易都市として発展していった。1096年から始まる十字軍は、ヨーロッパのキリスト教世界に生きるユダヤ教徒の政治的・主教的立場と社会・文化を激変させた。強制的にユダヤ教からキリスト教への改宗が進められると、その1年後には「カノッサの屈辱」で知られるハインリヒ4世(Heinrich IV, 1050-1106年、うち神聖ローマ皇帝としては1084-1105年在位)によってユダヤ教に戻る事が許された。十字軍の時代を通じて組織された「ユダヤ十字軍」をレーゲンスブルクでは除外されたともいえる。

1182年、神聖ローマ皇帝の赤髭王フリードリヒ1世は、レーゲンスブルクのユダヤ教徒に以下のように宣誓した。「われらは、わがレーゲンスブルクのユダヤ人に対し、今日までのユダヤ人の先祖歴代に補償してきたよき習慣や栄誉を認め、帝国の権威として確認する。」⁵⁾

レーゲンスブルクのユダヤ教徒ことユダヤ人⁶⁾は、主として中央ヨーロッパならびにスラブ諸国との交易に従事していた。「かれらは、自分たちの古代からの習慣に従って金、銀、その他の宝石類を売り、他の商品[訳注：馬など]も扱うこともあった。」⁷⁾レーゲンスブルクは、交易の対象地域としてスラブ地域(ボヘミア、ウクライナ、ロシアなど)があげられる。

中世のレーゲンスブルク⁸⁾は、神聖ローマ帝国の首都として機能していた時代もあり、帝国議会が開かれて爵位を授与・廃止される一方、赤髭王フリードリヒ1世の率いるドイツ騎士たちの第3回十字軍が出発した地域でもある。また、司教座がおかれ、宗教と生活・文化の中心的な役割を果たしていた。また、13世紀から始まるアンチ・セミティズム(反ユダヤ主義)が激しさを増した町として知られる。

神聖ローマ帝国ではしばしば皇帝の公文書としてのいくつも金印勅書(bulla aurea)が発令された。そのうち、1356年にカール4世(Karl IV,

1316-1378)が発令したものはとくに有名なものである。皇帝は3名の大司教(マインツ、トリア、ケルン)に有力貴族を加えた計7名の選帝侯によって選ばれ、教皇の承認は不要とし、諸侯の最上位として領内の裁判権、鉱山などの採掘権、関税徴収権、貨幣製造権とともにユダヤ人の保護権を有していた。選帝侯の子孫たちは当時、神聖ローマ帝国で流布していた言語であるドイツ語、ラテン語、イタリア語、スラブ語を7歳のときから学習することが義務付けられた⁹⁾。大空位時代の皇帝不在を避け、封建制(Lehen)の死守のため、金印勅書はそれまでの規則を継承しつつ、時代によって修正・変更してきたともいえる。ユダヤ商人を保護したり、弾圧したりしたのは時代を反映したともいえ、とくに十字軍以降はアンチセミティズムが激しさを増していった¹⁰⁾。

2. ラビ・パタヒアと中世の旅行家たち

12世紀は、中世ヨーロッパが経済的・商業的に飛躍した時代と指摘されている。十字軍は中世ヨーロッパの騎士たちに異国・異郷を体験させ、ルネサンスに向けて活発な動きを示した時代でもある。その一方で、魔女狩りが激しさを増し、(ローマ)教皇と(神聖ローマ)皇帝の争いが始まりつつあった時代でもあった。

パタヒアの生きた時代のレーゲンスブルクは、まだゲッターはなく(ユダヤ人居住区はユダヤ教徒だけではなく、キリスト教徒も住み、そこにユダヤ教徒の墓地とシナゴークの建設が始まったのは、1210年だった)、シナゴークもなく(1227年に完成)、ユダヤ教徒の商人たちが比較的、重宝された時代であった。その一方で、第3回十字軍が派遣される直前でもあった(皇帝フリードリヒ1世の率いる第3回十字軍がレーゲンスブルクから遠征に向かうのは、1189年)¹¹⁾。自由都市として中世を謳歌していたレーゲンスブルクの役割は減少しつつあったといえる。

レーゲンスブルクのパタヒアの旅行は、1170年から1187年にかけてと想定されている。12世紀前半に生まれ、プラハに数年、滞在した後に彼の旅行が始まった。ポーランド、キエフ、クリミ

ア、タタール、アルメニア、中東、ペルシア、イラク、シリア、パレスチナ、ギリシャを旅している。確かなことは、1174年から1187年の間はダマスカスに滞在していた¹²⁾。

ここに中世を代表する著名な旅行記を残した、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒についてまとめてみた (*邦訳あり、**部分訳ならびに解説あり)。

中世を代表する旅行家を見ると、生粋の商人はマルコ・ポーロ¹³⁾くらいで、他の旅行家は巡礼(エルサレム、メッカ)や布教などの宗教的・政

治的動機を理由に旅行に向かった。イブン・バットゥータもメッカ巡礼を口実に3度も旅行に向かっている¹⁴⁾。キリスト教の宣教師のうち、フランチェスコ会が多いのは、活動修道会のフランチェスコ会は、異端とのぎりぎりをすり抜けて、中東や中央アジアに活動拠点をもっていた。ロシアやポーランドにまで侵入してきたモンゴル帝国に対し、教皇は使節を派遣する必要を痛感していた。その使節に選ばれたのが、カルピーニとルブルクであった¹⁵⁾。広大な地域を支配したモンゴル帝国は主従関係を崩さずに国内の価値観として

表 1

[中世を代表する大旅行家たち]			
人 名 (生年—没年) [宗教]	旅行期間	出身地	旅行地域
Ahmad Ibn Fadlān (生没年不詳) * [アッバース朝カリフの命を受けてイスラム法学者として北方へ旅。]	921-922		ヴォルガ、ブルガール、ハザール、ホラズム、ロシア
Judah Halevi (ca.1075-1141) [ユダヤ教徒の学者、詩人、哲学者]	1140-1141	Toledo or Tudela	アンダルシア、エジプト、エルサレム
Benjamin de Tudela (1130-1173) ** [ユダヤ教徒の宝石商?]	1165-1173	Tudela	南欧、アナトリア、中東、アラビア半島
Moshe ben Mayimōn (1135-1204) ** (ラテン名) Maimonides [ユダヤ教徒の学者]	1148-1166	Cordoba	アンダルシア、北アフリカ、パレスチナ、エジプト
Rabbin Petachia (?-1225) [ユダヤ教徒]	1170-1187	Regensburg	中欧、中東、バルカン半島
Iohannes de Carpini (1185?-1252) * [フランチェスコ修道会の修道士]	1245-	Villa Pian di Carpini	中欧、ロシア、モンゴル、
Ibn Jubayr (1145-1219) * [イスラム教徒の学者、旅行家]	1183-1217	Valencia	アンダルシア、南欧、中東、アラビア半島、エジプト
Guillaume de Rudrouk (1220?-1293?) * [フランチェスコ修道会の修道士]	1253-	Rudbrouck (Flanders)	アナトリア、南ロシア、モンゴル
Marco Polo (1254-1324) * [キリスト教徒の商人]	1271-1295	Venezia	南欧、中東、中央アジア、中国、東南アジア
Odorico di Pordenone (1286-1331) * [フランチェスコ修道会]	1296-1329/30	Pordenone	南欧、バルカン、アナトリア、中東、インド、東南アジア、中国
Ibn Battuta (1304-1369) * [イスラム教徒の法学者]	1) 1325-1332 2) 1332-1347 3) 1349-1354	Tangiers	1) 北アフリカ、中東、東アフリカ 2) 中東、インド、東南アジア、アラビア半島、北アフリカ 3) アンダルシア、南イタリア、北アフリカ、西アフリカ
Sir John Mandeville (?-1372) * [キリスト教徒の騎士。カタイ(中国)旅行、實在是疑問視]	(1322/1332-1372?)	England	中東、インド、中国、東南アジア
Ibn Khaldūn (1332-1406) [イスラム世界を代表する歴史家]	生涯を通じて仕官先を変え転々。	Tunis	モロッコ、アンダルシア、カステイリヤ、アルジェリア、エジプト、シリア

の国教を模索していたことも事実で、またモンゴリア高原の有力部族のうち、ケレイト、ナイマンの両部族は西方の文化的影響を受けており、中にはネストリウス派のキリスト教徒も相当数いたと想定されている¹⁶⁾。

また、ユダヤ教徒は生活、食事制限などの必要からコミュニティに住む必要があった。また、女性はユダヤ教徒と婚姻関係が必要であった。ユダヤのコミュニティの指導者であるラビはしばしば遠方のコミュニティのラビと交際があり、ユダヤ教徒の旅行家がラビであったのもそのためであると想定される¹⁷⁾。ラビは宗教活動でユダヤ教徒から金銭を受け取るべきではなく、よってユダヤ教徒の花婿の世話やコーシエルの認定で生計を得ていたのである。

中東を起点にアジアとヨーロッパを結び付けたのがイスラム世界であったが、それをさらに大規模に発展させ、交易によって繁栄と旅の安全¹⁸⁾を保障したのがモンゴル帝国であった。モンゴル帝国のハーンの金印の通行書はさしずめ現代の外交旅券であった。だからこそ、マルコ・ポーロの一行がイルハーン国のフレグ・ハーンの発行した金印がそのまま元王朝の大ハーンにして兄のフビライ・ハーンの許に赴いたときも十分に通用したのである。

旅行者ならびに旅行記は閉ざされた中世ヨーロッパの時代にあって、外の世界の情報をもたらしてくれるものであった。とくに十字軍以降、外の世界の情報に飢えていたキリスト教圏の人々は旅行者の来訪や話に熱中した。

多くの旅行家に交じって、ユダヤ教徒の学者マイモニデス、イスラム教徒の学者イブン・ハルドゥーンの旅は政治的・社会的変化に対応する形で旅行しており、少々、違和感を受けるかもしれない。マイモニデスはカイロのユダヤ教の指導者として、各地からのユダヤ教徒の質問に対してユダヤ・アラビア語（ヘブライ語で表示し、ヘブライ語を多用しているアラビア語）でレスポンス（書簡）として答えた。その1つ『イエーメンからの手紙』は内容的には彼の波乱の半生を描いた著書であることはすでに筆者は論じた¹⁹⁾。また、またシリアを包囲・攻撃したチムールとの対談で知

られるイブン・ハルドゥーンの自伝に記載されている旅行は現代で言うならば「日記」に近い²⁰⁾。

3. パタヒアと旅行と旅行記

パタヒアの旅行記のヘブライ語原本は、すでに1595年、プラハで出版されている。1687年にはドイツのアルトドルフ (Altdorf) でドイツ語に翻訳された。1831年には、ストラスブルでラテン語訳が、パリでフランス語訳が出版され、1856年にはロンドンで英訳が出版されている²¹⁾。

אֱלֹהֵי הַסְּבוּבִים אֲשֶׁר סָבַב רַבִּי פְּתַחְיָה
שָׁפַע אֶת כָּל הָעוֹלָם :
בַּתְּחִלָּה הֵלֵךְ מֵרִיגֶנְשְׁבֵּרְג • עִיר מוֹלְדֹתוֹ
לְפְּרָאגַּ וְרֵאשׁ מַמְלַכְתַּת בּוֹהֶמְיָא • וּמִפְּרָאגַּ נָסַע
לְפּוֹלוֹנְיָא • וּמִפּוֹלוֹנְיָא לְקִיּוֹב • שְׁבַרְוִיסְיָא • וּמִשָּׁם
הֵלֵךְ בְּשֵׁשֶׁת יָמִים עַד נְהַר דְּנִיפְרָא • וּמֵעֵבֶר
הַנְּהַר הַזֶּה הִתְחִיל לֵילֵךְ בְּאַרְצֵי קֶדֶר :
תּוֹשְׁבֵי הָאָרֶץ הוֹאֵרֵת אֵין לָהֶם סְפִינּוֹת •
אֲלֵא תּוֹפְרִין עֶשֶׂר עוֹרוֹת סוֹסִים שְׁטוּחִין
וְרִצּוּעָה אַחַת בְּשֵׁפֶה סָבִיב • וְיוֹשְׁבֵי עַם
הָעִנְלוֹת וְהַמְשָׁא בְּתוֹךְ הָעוֹרוֹת • וְקוֹשְׁרִין
רִצּוּעָה בְּשֵׁפֶת הָעוֹרוֹת בְּזַנְבוֹת הַסּוֹסִים •

これは世界を旅したラビ・パタヒアの旅行である。

彼は生まれ故郷のレーゲンスブルクを出発し、プラハに到着した。そこはボヘミア王国の首都である。プラハからポーランドに向かい、さらにポーランドからキエフ、ロシアに向かった。そこから、6日間をかけてドニエプル (川) に達し、さらにケダルの地に達する。

この国の住民は、船をまったくもたず、移動には馬に12人が乗れる改良をし、それを利用して国境までも出かけたりしている。馬は泳ぐことができ、川を渡ることができる。彼らはパンを食べずに米を食べ、沸かしたミルクやバター、チーズを食する。彼らは肉を大きく塊に切って、馬の鞍の下にしまっている。馬を汗だくだくに俊足で走らせ、肉を温めて食べるのである²²⁾。

仏訳者の脚注によると、ケダルの国とはもともとアラビア半島の砂漠地帯を意味する。ケダルとはアブラハムの息子イシュマエルの息子のことで

あり、旧約聖書の伝説によると、アブラハムが正妻サラの女奴隷であったハガルに産ませたイシュマエルを二人の女性の反目に困り果て、親子とも砂漠に追放したとされる²³⁾。「ケデルの地は案内人がいないと、旅行が難しい」と言って、旅の記録を続ける。また、「王はいないが、王族や貴族はいる」と記している²⁴⁾。

וְעָבַר רַבִּי פִתְחִיָּה אֶת אֶרֶץ קָרָר לְרַחֲבָהּ

בְּשֵׁשֶׁת עָשָׂר יוֹם • וְיוֹשְׁבֵי אֵתְלִים הֵם •
וְרוֹאִים לְמַרְחֹק • וְעֵינֵיהֶם יָפִים מִפְּנֵי שְׂאִינִם
אוֹכְלִים מֶלֶח • וְחוֹנִים בְּעֵשְׂבִים שְׂנוּתִים רִיחַ
טוֹב • גַּם בְּעַלֵי חַצִּים הֵם • וּמוֹרִים אֶת הָעוֹף
בְּהַרֵי דְקָא פָּרַח • וְלֹא לִבְר שְׂרוּאִין יוֹתֵר מִמֶּהֱלֵךְ
יוֹם • אֶלָּא שָׁנִים מִכִּירִין •

(ラビ・パタヒアは)16日かけてケデルの地を通過する。住民は休んだり、眠ったりするときはテントの中で過ごす。鋭い視力を持ち、美しい目をもっている。というのも、塩はほとんど取らず、畑に住んでいる人たちだけが快適な香りを発散している。彼らはすばらしい弓の使い手で、飛んでいる鳥を自分たちの矢で貫く。彼らは交易の旅路から離れていても、目標を狙うだけではなく、それが何か識別することができる²⁵⁾。

中央アジアに栄えたユダヤ教徒によるハザール王国について、「ケデルの地の交易街道を進むと(カスピ)海に到達する。(カスピ)海の反対側にハザールの地がある」²⁶⁾と記録している。パタヒアが通常の地中海ルートではなく²⁷⁾、ロシア・中央アジアのルートで聖地エルサレムに向かった理由もユダヤ国家としてのハザール王国の噂を確かめたかったためであると思われる。

וְהֵלֵךְ רַבִּי פִתְחִיָּה אֶת הָאָרֶץ הַזֹּאת בְּשֵׁמוֹנָה
יָמִים • וּבְסוּף אֶרֶץ פְּזוּרְיָא • שְׂבַעַתָּה עָשָׂר

וּבְמִזְרֵיָא עָבַר רַבִּי פִתְחִיָּה בְּאֶרֶץ תּוֹנְרָמָה •
וּמִשָּׁם וְהֵלְאָדָה מְאֻמֵּינִים בְּהַקְוֵרָה מִחֻמַּט •
וּמִתּוֹנְרָמָה נָמְסָם לְאֶרֶץ אֲרִיֵט • וּבְשֵׁמוֹנָה
יָמִים הֵלֵךְ עַד נְצִיבִין • וְעוֹב הַהַרִים הַגְּבוּהִים
דְּרֵי אֲרִיֵט • לְיָמִין •

ラビ・パタヒアは(ハザール)の地を通り過ぎるのに8日を費やした。ハザールの地には17の河川が流れており、それが1つの川に合流することによって終わっている。

(中略)ラビ・パタヒアはハザールの地からタガルマの地に向かった。そこはイスラムのよりもずっと遠いところであって、アララット山の入り口のところである。タガルマから8日かけてニシビンに到達する。その右側からアララット山の美観が望める²⁸⁾。

タガルマとは、現在のグルジアあたりをいう。ガマルの息子とはグルジアを意味し、タガルマと呼ばれた。同様にアルメニアのことも意味すると仏訳者は注釈に付記している²⁹⁾。また、アララット山とは現在アルメニアとトルコの界にある(現在はトルコ領だが、アルメニアはこの周辺を西アルメニアと呼んでこれを認めていない。)5137メートルの双峰の山で、周囲に山脈のない美しさは古代から知られており、またノアの箱舟が大洪水後に辿り着いたところという伝説が残っている³⁰⁾。

中世の時代、1日につき、平均して30キロ程は歩いたと伝えられている。マルコ=ポーロも中国までの9千キロも約30キロで歩いたとされる。街道とルートの整備が前提になっているが、パリからアミアンまでの130キロを2日で歩いたという記録がある³¹⁾。

参考資料

レーゲンスブルクのパタヒアの旅行地図

注 (原稿枚数の関係で参考文献は列挙せず、注を

もって代行することにした。)

- 1) NPO 法人・世界遺産アカデミー監修, 2016 年 1 月, 『世界遺産大事典<下>』(発売元: マイナビ出版), 101 頁, <http://whc.unesco.org/en/list/1155>(2017 年 8 月 2 日取得)
- 2) <http://www.regensburg.de/buergerservice/stadtgeschichte/regensburg-im-spaeten-mittelalter>
- 3) 阿部勤也 (平凡社, 1978 年)『中世と旅した人々—ヨーロッパ庶民生活点描』, 12 頁, また現在, レーゲンスブルク市にはドナウ川を利用した交易の歴史を扱った博物館がある. Regensburg Museum of Danube Shipping (Donau-Schiffahrts-Museum Regensburg)
- 4) Keterpress Enterprises (Jerusalem, 1972) *Encyclopedia Judaica*, vol.14, p.35
- 5) *ibid.*p.35
- 6) 一般に中世ヨーロッパにあつては, ユダヤ人といえば宗教的・文化的にユダヤ教徒として理解していいといえる. ユダヤ教としても, ハシティズムを含む正統派は少数で, 大半は保守派と考えるべきで, もちろん近世・近代以降にヨーロッパで誕生した改革派はいない.
- 7) Keterpress Enterprises (Jerusalem, 1972). *Encyclopedia Judaica*, vol.14, pp.35-38. なお, スペインのイスラム王朝であったナスル朝とレーゲンスブルクのユダヤ商人たちは非合法とされながらも, 武器, 奴隷を扱っていたとされる. 木村直司『ドナウの古都レーゲンスブルク』(NTT 出版, 2007 年), 106 頁. なお, 同書は小冊子ながら参考文献, 年表なども完備しており, なかなか便利である.
- 8) 中世レーゲンスブルクのアンチセミティズムについては, Stephan Acht, Hans-Jurgen Becker, Karl Josef Benz, etc., *Regensburg Im Spatmittelalter: Bestandsaufnahme Und Impulse* (Forum Mittelalter: Studien) (Schnell & Steiner, 2006) があるが, パタヒアの生きた時代よりも後の時代を扱っており, 紹介のみに留める. また, 神聖ローマ帝国については, もっぱら James Bryce, *The Holy Roman Empire*, Lonson, 1905 に準じた.
- 8) 木村直司, 前掲書, 151 頁以降. H. H. ベンソン編『ユダヤ民族史』(六興出版, 1977), 第 4 巻, 32-36 頁参照.
- 9) 木村直司, 前掲書, 110 頁.
- 10) レオン・ポロアコフ, 菅野賢治訳『反ユダヤ主義の歴史』(筑摩書房, 2005), 第 1 巻, 63 頁以降.
- 11) 年号については, 木村直司, 前掲書, 巻末の関連歴史年表, iv 頁ならびに *Encyclopedia Judaica*, vol.14, p.35 を照合.
- 12) Elkan Nathan Adler, *Jewish Travellers in the Middle Ages - 19 Firsthand Accounts* (New York, Dover Publications, Inc, 1987), p.64 による. ただし, パタヒアの旅行は, 1170 年から 1180 年までで, 1187 年以前は十字軍が建国したラテン王国にいたという指摘もある. *Wesster's Online Dictionary*, Ratisbon - *Wesbster's Timeline History 1145-2004*, (San Diego, ICON Group International, Inc., 2010), p.5
- 13) マルコ・ポーロが父と叔父に連れられて, 10 代の少年のときに東方への旅に向かった理由は謎である. 祖国ヴェネツィアである少女を愛し, 妊娠させたためという俗説はともかく, 少年のときに異国の地を訪れた結果, 中国語やモンゴル語を含む 10 ヶ国近くの言語を習得できたのであろう. マルコ・ポーロがヴェネツィアとジェノバの戦争 (Meloria の戦, 1284) の過程で捕虜となり, さらにジェノバとピサとの戦 (Curzola の戦, 1298 年) でピサの捕虜になったのが 1298 年ごろとされる. 軟禁されていたときに守衛に話したとされる東方の旅は物語作家のピサのルスティケロ (Rustichello da Pisa) によって北イタリア語に書き留められ, のちにラテン語訳されて広くキリスト教ヨーロッパに知られた. それについては, 高田英樹編『世界の記』(名古屋大学出版会, 2013 年)に原文が収録されている. なお, ラテン訳語については, A. C. Moule and Paul Pelliot, *Marco Polo - The Description of the World-as Transcribed in the Original Latin*, Vol. II (London, 1935/2010) を参照のこと.
- 14) 詳しくは, 家島彦一『イブン・バトゥータの世界大旅行』(平凡社新書, 2003 年)ならびに同氏がライフワークとして翻訳を完成させた東洋文庫 (平凡社, 1992-2002 年) に注記されて

- いる訳注は一読に値する。
- 15) 護雅夫編『中央アジア・蒙古旅行記』（講談社学術文庫, 2016）参照。なお、編者・訳者による訳注ならびに巻末の解説は一読に値する。また、中世のユダヤ教徒の代表的な旅行家を概観してみると、ユダヤ商人が旅行家として活躍していたことは実感できる。cf, Elkan Nathan Adler, *Jewish Traveller (801-1755)*, London (George Routledge & Sons), 1930 = New Delhi/Madras (Asian Education Services), 1995, Elkan Nathan Adler, *Jewish Travellers in the Middle Ages - 19 Firsthand Accounts*, New York (Dover Publication Inc.), n.d. (同著は同じ著者の前書のタイトルを変えたりプリント版と思われる), Haïm Harboun, *Les Voyageurs juifs du XIIIe, XIVe et XVe siècles*, Aix-en-Provence (Editions Massorth), 1988
 - 16) ジンギス・ハーンの第4子のトルイの正妃であり、モンケ、フビライ、フレグ、アrikブケの実母であったソルククタニ・ベキ (Sorqaqtani Beki, 1192?-1252) はケレイト部族の王族の出身であり、ネストリウス派の信徒でもあった。
 - 17) ユダヤ社会ならびにコミュニティの指導者であるラビ(アシケナージ[ドイツを含む中央ヨーロッパでの名称で、アンダルシアや北アフリカでは一般にハカムと呼ばれた]) や若き日にミドラシュ(ユダヤ中等高等教育機関)やイエシュヴァ(ユダヤ最高高等教育機関)でユダヤ諸学(ヘブライ語, アラム語, 旧約学, タルムードなど)を学び, 各地から集まってきた同輩と親交をもった。母系社会のユダヤ社会にあって, ユダヤ教徒のとくに女子は結婚の際, 結婚相手もユダヤ教徒であることが絶対的に必要であり, その仲介をラビに依頼した。ユダヤ社会において, しばしば初めての見合いの日の午後に結婚式があったのはそのためである。
 - 18) 阿部勤也, 前掲書, 14頁
 - 19) 「コルドバとともに生きた人々(3)」, 文京女子短期大学英語英文学紀要(第24号), 1991年12月
 - 20) たとえば, 名声高きイブン・ハルドゥーンを自らの軍営に招いたチムールはイスラム暦803年サファル月15日(火曜日), すなわち西暦1400年10月5日に対談が行われたことなどが記載されている。
 - 21) Elkan Nathan Adler (New York, Dover Publications, 1987), *Jewish Travellers in the Middle Ages-19 Firsthand Account*, p.64, Elkan Nathan Adler (New Delhi, Asian Education Services, 1930, 1995), *Jewish Travellers (801-1755)*, p.64 同じ著者・訳者による後者の著書は(London, George Routledge & Sons, LTD, London)の完全復刻本である。両著とも訳文も頁数も変わりはない。また, 同書の英語とヘブライ語の対訳がWEB上にPDFで公開されていたことになっているが, 今は閲覧できない(Not found. Error404)。(http://onlinebooks.library.upenn.edu/webbin/book/lookup?key=olbp26098, 2017年8月5日取得)なお, ヘブライ語からの翻訳にあたっては, Eliakirn Carmoly, *Tour du Monde ou Voyages du Rabbin Petachia de Ratisbonne dans le Douzième Siècle*, Paris (Imprimerie Royale, 1831)を底本とし(Kessinger Publishingによる完全リプリント版。なお, 本論文作成には同書の完全リプリント版が刊行されたのが大きい。), 同氏の仏訳ならびに複数の英訳を参考にした。William Ainsworth tr., *Travel of Rabbi Petachia*, CPSIA, 2012, Andesite Press, 2015), Elkan Nathan Adler, *op.cit.*を参照のこと。
 - 22) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.9
 - 23) 「旧約聖書一創世記第25章-12-18節」参照。なお, イスラムの伝説によると, ハガルとイシュマエル(イスラム名はイスマール)は砂漠を放浪していたときに天使の声を聴き, その言われるままに砂を掘るとオアシスの水が湧き出た。そこがメッカの町になったという。
 - 24) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.11
 - 25) *ibid.*, p.11
 - 26) *ibid.*, p.12 スペイン・アンダルシアのイスラム王朝であった後ウマイヤ朝の外務担当大臣であったユダヤ教徒のシムエル・ベン・シャブルートが人づてに中央アジアのハザール王国の噂を耳にし, ハザール王国にヘブライ語の手紙を託したが, 何年もかかって手紙が戻ってきたが, そのときすでにハザール王国は滅んでいたという史実について筆者はすでに紹介した。

「コルドバとともに生きた人々 (1)」, 文京女子短期大学英語英文学科紀要 (第 22 号), 1989 年 12 月参照. なお, ハザール王国については, Arthur Koestler (New York/London: Last Century Media, 1976), *The Thirteen Tribe – The Khazar Empire and Its Heritage* を参考にした. トルコ系とユダヤ系女性との婚姻に結果, 黒海北部からカスピ海北部にかけて栄えた中世の謎のユダヤ教王国は, 王国壊滅後, 中央ヨーロッパや北ヨーロッパに拡散した. その意味ではイスラエル 12 支族の血縁を直接, 引き継いではいないと考えられる.

- 27) Eliakim Carmoly, *op.cit.*, p.13
- 28) 中世ユダヤ社会が生んだ他の代表的な旅行家を見ても, トッデラのベニヤミンにしても, 『ハザールの書』で名高い詩人のラビ・ユダ・ハレジにしても, 地中海ルートでエルサレムに向かっている. Haim Beinart, Moshe Shalvi tr. (Jerusalem The Israel Map and Publishing Co. LTD, 1992), *Atlas of Medieval Jewish History*, pp.45–47
- 29) Eliakim Carmoly, *op.cit.*, pp.14–15
- 30) アララットの地ならびにアララット山のことは「旧約聖書」でも「創世記」(8:4) から始まり「列王伝 II」(19:37) や「イザヤ書」(37:38) などに記載されている. Keterpress Enterprises (Jerusalem, 1972). *Encyclopedia Judaica*, vol.3, p.290
- 31) Michel Balard, “Conclusion”, p.308, Société des Historiens Méditerranéens de L’Enseignement Supérieur Public ed., *Voyages et Voyageurs au Moyen Age*, Paris (Publications de la Sorbonne), 1996

(2017.9.26 受稿, 2017.10.12 受理)